

## 冥慮

### 蓮師の慈訓

「一、同行同侶の目を恥ぢて、冥慮を恐れず、たゞ冥見を恐ろしく存すべきことなり。」とは蓮如上人の御慈訓であった。

冥慮と言ひ、冥見と言ひ、冥加と言ふ。如来の御照覧を言うのである。我等は今、この文字の前に厳肅に襟を正して、み教に聞かなくてはならぬ。

世間の体裁のみを飾り、人目のみを恐れて、如来の御冥見、御冥慮を恥ぢず、感謝せぬ所、やがて三悪道の苦惱が待つ。

「同行同侶の目を恥ぢて冥慮を恐れず。」

信心うすき者の正体、この一句につきる。戦慄に値す。頭かくして尻かくさず。天地の間、万物悉くその正体を暴露して、一物をかくさず。されば「たゞ冥見を恐ろしく存すべきなり。」この慈訓厳戒の前に無條件であれ。

### 冥加に叶う

蓮如上人、御一代問書に曰く、

「一、蓮如上人御若年の頃、御迷惑のことにて侯ひし、たゞ、御代にて仏法を仰せられたれん、と思召し候。御念力一つにて御繁昌候。御辛勞故に候。

一、御病中に蓮如上人仰せられ候。御代に仏法を是非とも御再興あらんと思召し候。御念力一つにて斯様に今まで皆々心安くある事は、此の法師が冥加に叶ふによりての事なり。と御自讃ありと云々。」

驚くべき自信ではないか。

「この法師が冥加に叶ふによりての事なり。」とは、上人の念仏生活が、如来聖人の聖慮に叶ひ、その加被力を得たまへるが故に、仏法を繁昌せしめたいとの御念力を通して、仏法の御再興成就したのだと、御自讃あつたと言ふのである。

真実道を歩みきつたる者へのみ与えられる、地上最高の賜物である。天爵である。

### 真の成功

「一、同じく仰せに何事をも思召す儘に御沙汰あり、聖人の御一流をも御再興候ふ……御隠居候。然れば我は『功成り名遂げて身退くは天の道なり』という事、其れ御身の上なるべき由仰せられ候ふ。」と

上人は自らを功成り名とげたと仰せられるのである。真の成功者と思召すのである。重々、驚くべき御自信ではないか。

信心には一面、懺悔がある。しかし懺悔は、決して人生が失敗に帰した者の自卑ではない。ましてや後悔ではない。如来の御冥慮に覚めて生きる者の合掌の心である。

懺悔は歓喜を拒まない。真に人生感謝の人にして懺悔あり。如来智慧光さながらの歓喜に生きてこそ、如来の御冥見を恥じ、御冥慮を喜び、御冥加に感謝するのである。

如来聖人の御冥慮に叶わんことのみを生活の第一義とする者にのみ、真の成功がある。

我が須々万支部善徳寺の老院桂教信師は、かつて「先生、私は真の成功者だと思えます。如来は私を成功者にして下さいました。それで二人の倅をも成功者にしてやりたいと思います。」と言われた。この人の念仏を拝せよ。この師の行持を見よ。門徒村民の崇仰を見よ。しかして蓮師と同一の自信を見よ。この師にしてこの言あり。しかも師は静かなる念仏の行者である。一貫相続の行歩の偉大なる哉。

### 最大の恥

前に如来まします。後にも如来まします、陽にも如来まします、陰にも如来まします。人と共に居る時にも如来あり、独居の時にも如来まします。

如来は十方正面である。衆生も十方正面である。いかなる時、いかなるところにも如来は衆生と共にあり。しかるに、衆生は、人目を知りて、陰陽かげのなたを作り、如来の十方正面にてましますを知らず、ただ虚偽いつわりをもつて固めて大信骨髓にとおらず。念仏すとも御冥見を恥じず、御冥見に叶わず。栄えるということなし。如来真実の御冥見を恥じざるをもつて人間最大の恥となす。

### 冥加に叶うとは

蓮如上人言く、

「仏法は一人居て悦ぶ法なり。一人居てさへ尊きに、まして二人より合はばいかほどありがたかるべき、仏法をばたゞ寄合々々談合申せ、の由仰せられ候なり。」と。汝を一人室内におけ、汝を一人旅に出せよ。汝一人の時、果してそこに如来ましますや。法悦ありや。感謝ありや。念仏ありや。

平生の相、汝の真相なり。行住坐臥、念仏になりきる。これを冥加に叶うと申すのである。

「前々住上人御病中に、兼蒼、兼縁、御前に伺候して、或とき尋ね申され候。(冥加という事は何としたる事にて候ふ)と申せば、仰せられ候。『冥加に叶ふというは弥陀をたのむ事なる』由仰せられ候ふと云々。」と。

念仏を行じ、本願を信じ、大法を聞き、大悲に生かされる。これをおいて外に、冥加に叶う道はあり得ない。されば己を空しうして、恭敬し合掌して唯々無我の小心に生かさるべきである。一度我がものを言いはじむれば仏法もまた、人を苦める我慢、邪見の因となるであろう。蓮如上人言く、

「皆人毎に、善き事を言いもし、働きもすることあれば、真俗共にそれを、我がよき者にはやなりて、その心にて御恩ということは打忘れて、我が心本になるによりて、冥加に尽きて、世間仏法ともに悪しき心が必ずく出来するなり。一大事なりと云々。」

御冥加を知るとは、無我に御恩を喜ぶことであつた。冥加尽きて恩を忘るれば、悪事のみ心中を往来するに至る。

墮落

本仏の御冥見に叶わぬ者は、教主世尊、教主善知識の聖意に叶わぬものである。教主善知識の教えを無視する者は、如来の大慈悲にもまたもれる者である。お聖教の少しもわかり、説教の度も重なれば、僧俗共に、如来聖人の御冥見を忘れ、如来を売り、善知識を売り、ついには、

「一、前々住上人仰せられ候、紳にも仏にも馴れては、手ですべきことを足にてするぞ、と仰せられける。如来上人善知識にも馴れ申すほど御心安く思うなり。馴れ申すほどいよいよ渴仰の心を深く運ぶべき事尤なる由仰せられ候。」

そのみ教の如く、教法に対する驚きもなく、馴れく／＼てついに

「人はあがりく／＼ておちばを知らぬなり。たゞ慎みて不断空恐ろしきことと事毎に付けて心を持つべきの由仰せられ候。」

とのみ教も忘れて、淋しき空洞なる我をゴマ化して生きるに至るのである。

柿の虫熟れ、親木より落つ。これを食うは愚者と幼児のみ。

人間の虫熟れ、如来の御冥加より離る。具眼の士これを捨て、愚者これにふれて被害を受く。

心すべき哉、念仏の子。俗衆に褒められ、喝采されんとして、如来聖人の御冥加にもるべからず。千万の俗衆に認められんよりは、一人の聖人のみ教に認められ、世間流転の巷に名を挙げんよりは、如来一人の御前に名を挙げねばならぬ。

耳口三寸の能弁に自他をあやまるよりは、沈黙して教法を聞き、念仏して己一人を充実するに如かず。大法の園には小賢しき才子を要とせず。ただ堂々一貫天地の大<sub>3</sub>道を生ききる一人を要す。

秋夜沈々、我が相を凝親して、戦々競々として、如来御冥見を恥じ、御冥慮に叛き奉る逆悪の子に、かくまで厚き冥加をたれたもう久遠の大悲に合掌悲涙す。我あまりに尊きものの数々を賜いぬ。いよく、全我を大悲光懐に捨てて、求道合掌に生きん哉。